序章

ペトロナスチームトムス

参戦から6シーズン目で悲願のダブルタイトル獲得！

11 月 5 日(土)、6 日(日)の両日、今シーズン最後となる戦い、ツインリンクもてぎでのフォーミュラ・ニッポン第 7 戦にて、2006 年よりフォーミュラ・ニッポンに参戦しているペトロナスチームトムスが、悲願のダブルタイトルを獲得した。参戦 6 年目にして手に入れたダブルタイトル、36 号車は参戦当時から変わらずアンドレ・ロッテラー選手がステアリングを握っている。その彼も来日して９年目、トムスに移籍して６年、彼自身もフォーミュラ・ニッポンの初ドライバーズタイトルの獲得となった。

2 レース制となった最終戦だが、公式予選の行われた土曜日には、TOM'S 自身、初ポールポジションを 2 レース共に獲得。ロッテラー選手は、２ポイントを加え、更にチャンピオンに近づいた。一方、ドライバーズタイトルをランキング 2 位で争う 37 号車の中嶋選手も予選後、6 ポイントと差が開いてしまったが、ロッテラー選手に続き、第一レース３番手、第二レース２番手でロッテラー選手に食い下がる健闘を見せた。そして決勝レースでは、第一レースは２台の攻防の末、第二レースは得意のウェットコンディションでロッテラー選手の圧勝と、両レース共に TOM'S ワンツーの完全勝利でドライバーズタイトルをロッテラー選手が獲得、それに続くランキング 2 位を中嶋選手が獲得し、最後まで横綱相撲で幕を閉じた。

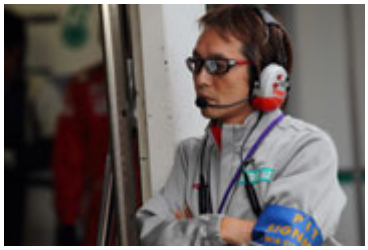
1. タイトル獲得に向けて始動！

今シーズン銅牆鉄壁（どうしょうてっぺき）、国内屈指の名門チーム、TOM'S　の今回のレースウイークを振り返ってみよう。

◆金曜日

早朝にトムス御殿場工場を出発し、サーキットにて設営作業をするチームクルー。二台のクルマは、工場にて“もてぎ仕様”にセットアップされ、持ち込まれる。夕方設営作業も落ち着いた頃になると、ドライバー二人が姿を見せた。
エンジニアとそれぞれやりとりもあり、また中嶋選手は、メディアの取材対応に追われていた。

◆エンジニアに聞く



東條エンジニアに週末の展開を聞いた。「いつも通りのことを、いつ通りにやる。明日の予選は、ポールポジションを獲得して、前に二台を並べ、決勝レースではスタート１周でチャンピオンを決めたい」と、大仕事の割には淡々と語ってくれた。抜きどころの少ないツインリンクもてぎ、確実にチャンピオンを獲得するには、予選上位につける事は必至。なおかつ、ポールトゥウィンをあっさり公約してくれた。
普段から、謙虚で飾らない性格、レースの話も等身大で、とても気さくに話してくれる東條チーフエンジニア。今季もトムスの二台、３６，３７号車を共にまとめ、SUPER GT

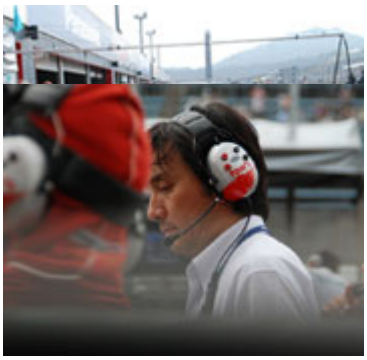
でもエンジニアを務める。そしてそれを支えるのが、37 号車担当小枝(さえだ)エンジニアとデータの解析も担当する横里(よこざと)エンジニア。舘監督のもと、チームスタッフ、メーカーのエンジン担当のスタッフと共にレースを戦っているのだ。
さて、前述の公約に繋がる自信の根拠を探ってみよう。

今シーズンのこの TOM'S の好調ぶり、どこでどう予想したのか？　東日本大震災でスケジュール変更となり初戦となった鈴鹿サーキットでの「優勝」がそう思わせたのだろうと普通は思う。しかし、そうではなく、2010 年 11 月に開催された“ JAF Grand Prix Fuji Sprint Cup 2010 ”で手ごたえを感じたそうだ。二日間に渡り 2 レース開催された訳だが、ロッテラー選手は後続を全く寄せ付けない速さで、２戦とも優勝を遂げている。第１レースに関しては、TOM'S のワンツーと圧勝。戦績と後続とのギャップは TOM'S のクルマの速さを物語っていた。東條エンジニアは、この時に今季の展望が既に見えていたようだ。しかし、改めて驚く事だが 7 戦中 5 戦も制す偉業を達成するとは、誰が想像したことだろう？

小枝エンジニアにも話を聞いた。彼は、フォーミュラ・ニッポンのエンジニアのキャリアは、４年となる。ちなみに東條エンジニアは、参戦２年目からの担当で５年目だ。
「このクルマになってから、TOM'S としてこれまでやって来たことがすべて反映されたシーズンだったと思う。全体的には、とても苦労したと自分では思っているが、みんなの力でチームタイトルも獲得し、ドライバーズタイトル争いもできている。あらゆる事をチーム全員でサポートし、みんなで戦う、このトータルの力が発揮されたのが、今シーズンなんだと思う。元 F１ドライバーの中嶋選手のシートが決まっても誰が来ても自分たちは、“ いつもの仕事をいつものように精一杯やるだけ ”」と…。自身もまだまだ勉強中と語る小枝エンジニアは、これまでフォーミュラ３、SUPER GT のエンジニアも経験済、これからの TOM'S の将来を背負って立つエンジニアなのだ。入社してすぐエンジニアに抜擢され、その後 2008 年のシーズンから彼のレースキャリアはスタートした。右も左もわからず、雲をつかむような状況だったと語るが、とにかく研究熱心で、今でもどの現場にも足を運んで勉強がしたいという。中嶋選手の良いところをもっと引き出してあげるのが自分の役目なのだが…と常に慎ましい。

2009 年に入社した横里エンジニア。途中からレース部門に変わり、東條エンジニアを支える存在となった。
彼も、小枝エンジニア同様、研究熱心だ。彼は、SUPER　GT でもエンジニアを務め、現場で活躍している。探究心の旺盛な若手エンジニアをチームで育成し戦っているのだ。
他にも、このカテゴリーに参戦当初 36 号車ロッテラー選手のエンジニアを務め、

初シーズンでありながら２勝もあげ、フォーミュラ３でこれまで幾度も世界の大舞台を制ししたチームのフォーミュラ部門を束ねている山田淳エンジニアの存在も忘れてはならない。それも考慮すると、日本のレース業界の老舗が、これから先もクォリティをそのままに君臨していく準備をしっかり整えている事が見て取れる。



メカニックたちに話を聞いても、“いつも通りのことをいつも通りに”と答える。実はこれが一番容易に見えて、大変難しいのではないかとも思った。ルーティンのピット作業であれ、緊急ピットインであれ、迅速な判断と作業を要求される。ピット作業で失った１秒を、コース上で取り戻すのは至難の業。それを肝に銘じて作業を行うのだ。緊張もあるだろう、でもいつも通りに…。平常心で常に戦って来たことで、これまで素晴らしい戦績を残してきた TOM’S だが、これに満足することなく、たゆまない努力を続けるチームの将来が楽しみでもある。

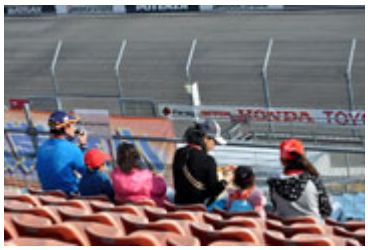
◆TOM’S と言うプロ集団

余談を続けさせてもらうと、TOM’S のクルマはいつもキレイな状態であるのをご存じだろうか？キレイであるというのは、細部にまで及ぶ。走行すると当然汚れるタイヤのホイール、そこまでぴかぴかに保つのがこのチームのクオリティ。あるイベントで、ピット作業のタイヤ交換のデモンストレーションが行われた。その際に、観客の方にも体験していただき、その際手が汚れないよう軍手を貸与していた。イベントが終わって、その軍手が汚れているとエンジニアからメカニックが指摘を受けた。タイヤのホイール、汚れていて当然と思っていたが、“軍手が汚れてしまうような仕事を TOM’S はしてはいけないのだ”と、エンジニアは諭すように言った。エンジニア自身もメカニック同様にタイヤのホイールを磨いていたが、職人肌のスタッフの教えのもと、若手メカニックもこうして育てているのだ。翌日のイベントでは、使用後の軍手がキレイだったのは言うまでもない。
メンテナンスにひと手間。ふた手間かけるこのチームのクルマは、トラブルが起きにくいことで知られている。手間をかけている分、異常が起きた際にすぐに気付くとのことだ。これがTOM’Sの強さの最大の秘密でもある。関係者に聞いたところ、他のカテゴリーでも、使用されているエンジンや、使用済のタイヤもメーカーへ返却される際には、しっかりメンテナンスされた上で返されているそうだ。チームにとっては、それが至極当たり前のことらしいのだが…。

長くなってしまったが、この日は、クルマのメンテナンスも午後７時過ぎで終え、サーキットを後にしていた。

2. 念願の初ポールポジション獲得！

◆予選日



快晴に恵まれたツインリンクもてぎ。午前７時からの車検を終え、フリー走行開始の午前９時２５分まで、少々時間があく。しかしメカニックはいつも通り慌ただしく動き回る。ドライバーの２人もサーキット入り。着替えを済ませピットに向かい、ほどなくしてフリー走行の時間を迎えた。

60 分間のフリー走行がスタート。開始直後から、36 号車ロッテラー選手はトップタイムを連発する。37 号車中嶋選手も 3 番手のポジションと好調。残り 10 分となった時点で、予選をシミュレートしたアタック合戦が繰り広げられ、順位は目まぐるしく変わる。最終的に、ロッテラー選手がトップタイム、中嶋選手は最後の最後でトラフィックにひっかかり 10 番手に終わったが、クルマの調子もよく誰も悲観する様子はなかった。フリー走行後、F1 ドライバーのヴィタントニオ・リウッツィ選手がロッテラー選手を訪れるシーンもあった。中嶋選手は、相変わらず取材対応に追われていたが、それでも予選前のまだ静かな時間を過ごしていた。

ピットウォークを経て、午後 2 時ノックアウト予選開始。まず 20 分間の Q1 のセッションを戦う。この Q1 でのポジションが、決勝第一レースのグリッドとなる。ロッテラー選手、フリー走行に引き続きトップタイムをマークし好調。なんと、彼はユーズトタイヤを使用して、他のニュータイヤでのアタックを圧倒した。中嶋選手、7 番手スタートからじっくりアタック。残り 2 分となったところで、ロッテラー選手は、トップを他車に奪われたもの、ラストアタックで逆転、念願のポールポジションを獲得した。中嶋選手 14 番手まで下がったポジションをロッテラー選手の直後に挽回、自己ベストではあったが 3 番手でセッションを終えた。

午後 2 時 30 分、7 分間の Q2 のセッション開始された。ベースのセッティングは変えず挑む TOM'S の二台。ロッテラー選手はいちもくさんにピットロードに出た。アタックラップで、1 分 33 秒 010（コースレコード）をマークしトップタイム、中嶋選手は残り 1 分で 2 番手につけ、Q3 進出を決めた。

午後 2 時 47 分より、7 分間の Q3 最後のセッションが始まった。ここでのポジションが、第二レースのグリッドとなる。好調なロッテラー選手はとどまることを知らない。今回も真っ先にピットロードに出ると、タイヤを温めたのち、1 分 32 秒 989 の脅威のタイムをマーク。再びコースレコードを塗り替えた。1 分 32 秒台に入れるドライバーは他になく、中嶋選手も 2 番手で食らいついたが、終わってみれば、2 戦ともポールポジションはロッテラー選手が獲得。2 ポイントをゲットした。

◆予選後

ロッテラー選手のコメント

「クルマの状態がとてもよくベースのセッティングをほとんど変更せずにセッションに臨んだ。Q1 は、路面のコンディションが朝と変わっていたり、ターン３でミスをしたり、トラフィックに引っかかったりで、100%のアタックはできていない。しかしポールポジションを獲得できて、良い一日だったと思う。これまでポールポジション獲得することのできず、呪われているのかと思っていたが、今日は２つも得ることができた。みんなで一生懸命仕事して、いろんなコンビネーションが作用すれば獲得することができるんだなあと感じた。明日は、スタートをミスなく決めること。チャンピオンのことを考えずに、シーズン中も同じだが、いつも通りにベストを尽くす」

中嶋選手のコメント

「ロッテラー選手とオリベイラ選手を追いかける形でスタートした予選だが、ユーズトタイヤでいろいろ状況を確認し、ニュータイヤを投入するまでセットアップを試した。今日は朝から、トラフィックに引っかかることが多くかなり難しい予選でイライラもしたが、自分を見失うことなく、納得の行く走りはできたつもりだが、ロッテラーがやっぱり

速かった。最終戦で言うのもなんだが、だいぶロッテラーを捕まえられるところまで来たと思う。ロッテラーとは 2 点開いてしまったが、抜きづらいサーキットですので、前に出て勝つチャンスを得たい。明日の天候もどうなるかわからないし、まだよくなる予知はあると思うので、全力で戦う」

会見では、コースレコードを記録したことについて質問が出たが、この結果については、チームと共に築いたもので、うれしく、また、これまでレコードホルダーだったオリベイラ選手に、トークショーでいつも自慢されていたそうだが、今度は自分の記録が掲げられることがとてもうれしいとも語っていた。

会見後は、サポーターズシートのサイン会に参加。大変ご機嫌なロッテラー選手。
チームの雰囲気も良く、クルーはレースに備えて、ピットインのシミュレーションに余念がない。それにロッテラー選手も加わるという場面も見られた。
すべてのスケジュールが終わってからも、あししげくピットに通うロッテラー選手。
中嶋選手もミーティングを終え、いくつか取材をこなし、午後６時にはサーキットを後にした。チームもトラブルなく過ごした一日で、午後９時半過ぎには帰路につき、予選の一日が終わった。

3. 機は熟した…

◆決勝日

朝から、小雨まじりのツインリンクもてぎ。霧も立ち込め、辺りは暗い。予選速報には、ロッテラーダブルポールの文字が躍っていた。いよいよ決まる、その日を迎えた。

決勝レース１は午前 10 時 25 分から、レース２は午後 2 時半からのスケジュール。今回のレース１は、ピットストップの義務がないガチンコレース、レース２は、タイヤ交換の義務がある（ドライタイヤ装着の場合に限る）というレギュレーションだ。前日の予選と路面コンディションが変わったため、レース１の前のウォームアップ走行は 13 分間に延長された。

ロッテラー選手 40 ポイント、中嶋選手 34 ポイントで迎えた決勝。早ければレース１でチャンピオンが決まってしまう可能性があった。ポールシッターのロッテラー選手にアドバンテージがあることは確かだが、“ 大事なところでミスしちゃうから ” と東條エンジニアはいつものように冷静。シリーズチャンピオンの行方を詰めかけたファンに見守られながら、レース１のスタートを待った。

◆レース１（23Laps）歓喜の時

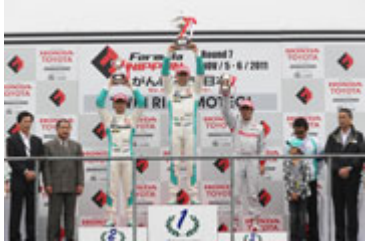
まだレコードラインは乾いているが、小雨が降る中、ロッテラー選手と中嶋選手は、１－３のポジションからスリックタイヤでスタートした。シグナルがブラックアウトすると、注目のスタートは、二台ともミスが無く、１コーナーをワンツー体制で通過、中嶋選手はポジションを１つ上げることに成功。後方グループは１コーナーで混乱、コースアウトするクルマも見られた。

トップの TOM'S の二台は、オープニングラップから、おもしろいように後続を引き離していく。ロッテラー選手は、1 周目で約 4 秒、3 周目で既に、3 番手のクルマに 8 秒以上のギャップを築いていた。中嶋選手は、ロッテラー選手を終始猛追。常に僅差で追い続け、終盤の 16 周目には 0.698 秒差で更に背後に迫る。しかし、レースはトップを快走するロッテラー選手の手中にあったと本人談。そして、いわゆる“チョイ濡れ”状態の路面は、ドライバーの中でもロッテラー選手の最も得意とするところであり、また抜きにくいコースですでにロッテラー選手は、余裕の走りを見せていた。中嶋選手は、全く諦めることなく、ファステストラップを連発。TOM'S の二台の攻防は最後まで続いたものの、最終的に中嶋選手が前へ出ることは叶わず、また、TOM'S の二台は後続を 30 秒以上も引き離してチェッカー。強い TOM'S を魅せつけ、レース１を終えた。この時点で、ロッテラー選手のシリーズチャンピオン、中嶋選手のランキング２位が確定した。

ファンの方から届いた千羽鶴がずっとピットに掲げられていた。以前、TOM'S が 2009 年の SUPER GT のチャンピオンのかかったレースの際にも、多忙の中おひとりで作って届け

てくださった。ロッテラー選手には、この時に“千羽鶴”の意味をスタッフが教えてあげていた。そして、横断幕にケーキと、ロッテラー選手は自分のビッグファンの方々にも、表彰台からお礼述べ、この時も感謝の気持ちを忘れなかった。

▽レース後のコメント



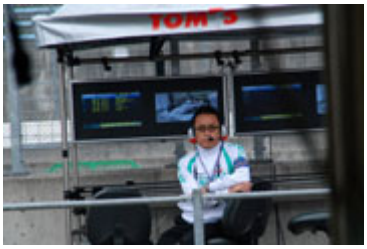
ロッテラー選手

「とても良いレースだった。スタートして数周でクルマのコンディションを合わせられるようにし、その後は自分のリズムで走ることを考えていた。一貴は常にプッシュをして来て、かつ最後のセクター２では、かなりハードに詰めて来ることがあったが、このレースは自分がコントロールできると思っていたので、パスされることはないと考えていた。クルマの調子がとてもよく、楽しいレースだった。ポイントは、計算していなかったので、チェッカーを受けた時点で、サインボードを見てチャンピオンになったことがわかったが、無線で確認をした。ウィニングランをしていて、第三セクター付近でやっと実感が湧いた」

中嶋選手

「3 番手からのスタートで、抜きにくいコースという事もあり、スタートで前へ出ることを狙って行った。アンドレがミスなくスタートを決めたので、あとは少しでもプッシュしてミスを誘うよう、極力プッシュして走行しました。自分自身としては、満足の行くレースではあったが、残念ながらトップには届かなかったことは自分の課題。22 周、ずっと予選を戦うような気持ちで走れたのですがすがしい気持ちである」

◆次は追われる立場になる



会見が終わり、ホスピタリティに戻りリラックスしたところで、念願のダブルタイトルについて舘監督に話を聞いた。

「悲願のタイトルで、今年は本当にうちは強かった。いいドライバーとスタッフもみんな良い仕事をし、チームに力がついたということを感じるシーズンだった。レースをやっている以上、ポールトゥウィンが目標なわけで、これまでそれができず…。シーズン前半は予選がとても悪く、ただレースには強くて、そういう予選の悪い時はコレしかない！という作戦で臨み勝ってきた。最後の最後で、ポールトゥウィンが達成できたことはとてもうれしい。参戦から６年、いつもチャレンジャーという気持ちで戦ってきた。この６年はあっという間だったね。これからは追われる立場になるが、そっちの方が長いかもね」

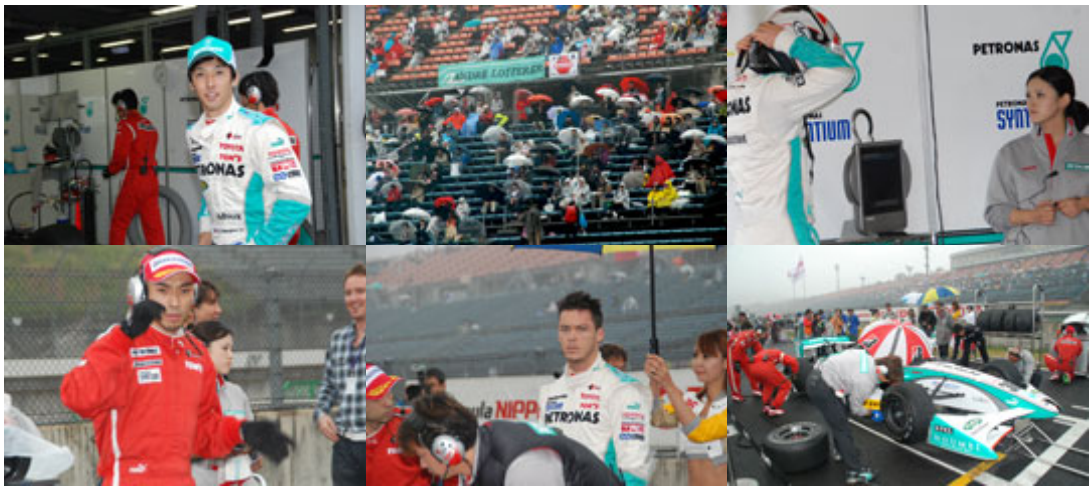
夫人に祝福を受ける舘監督。百戦錬磨の TOM’S ではあるが、表彰台では、監督がこみ上げるものがあったのだろう、言葉に詰まるシーンもあった。参戦当時、データの無い中、チームは戦っていた。それでも他チームからは、新規チームだが“要注意”とマークされるほどだった。とうとうフォーミュラ・ニッポンも王者となったのだ。この６年でノウハウも蓄積され、更に強くなった TOM’S。2011 年 11 月 6 日、とうとう晴れの日を

迎えた。まだレースが残っている為、チームスタッフは黙々と作業をしていた。
東條エンジニアは、昨日のポールポジションの方がうれしかったかな？と、ほぼ間違いないと言われたチャンピオンの獲得よりも、初めて獲得したポールポジションの方が、感慨深かったようだ。さすがに、うれしさをかみしめる暇もない今回のレーススケジュール。あとで、じっくり味わってもらいたい。
そして最終戦、最後のレース、レース２に午後２時半から、再び全力で臨むのである。

4. 最後まで威風堂々たる走り

◆レース 2（34Laps）

雨は小降り、ウォームアップ走行に、二台共にスリックタイヤでコースイン。ダミーグリッドに付くなり、雨は徐々に強くなり始めた。車高を上げるなど変更を施すため、メカニックは大忙し。そしてレインタイヤへ変更するチームも出始めた。TOM'S は、ぎりぎりまで待ったが、雨量は増すばかり。最終的にタイヤを履き替え、全車レインタイヤでレース２がスタートした。



スタート直後、再び TOM'S は、ワンツー体制を築き 1 コーナーを通過するが、ロッテラー選手から中嶋選手を含む後続のクルマは、ウォータースクリーンで前が全く見えない状態。雨量も時間を追うごとに増し、コースにも雨がたまっていく。そんな中、TOM'S の二台、殊にロッテラー選手は、雨など全く関係なくプッシュし、中嶋選手を大量リード。その中嶋選手もロッテラー選手と若干離れているものの、3 番手のクルマには大きく水をあける状況だった。そして迎えた 9 周目、ヘアピンで他車同士が接触、パーツが散乱している為、セーフティカーが導入された。

そして、セーフティカー先導で周回し、隊列を整えようとしていた 11 周目、雨でブラインドになった事が原因による多重クラッシュ発生。これにより赤旗が呈示されレースは中断した。ピットにいったん戻ったロッテラー選手と中嶋選手。ロッテラー選手は、「レースの続行は無理だよ」とスタッフに話していた。それほど危険な状況だった。

しかし、しばらくすると、再開のアナウンスが流れ、グリッドに戻った。各チームには、グリッド上で 5 分間の作業時間が与えられた為、TOM'S は車高を若干上げ、深溝のタイヤを装着するなどした。19 分間の中断ののち、セーフティカー先導によりスタート。その後、15 周目からレースは再開した。ここでもまた抜群のスタートを決めたロッテラー選手は、赤旗中断により失ったギャップをあっという間に挽回、圧倒的な速さで周回を重ねていく。中嶋選手も食い下がったものの、ロッテラー選手の速さに中々追いつけず。その後、やや膠着状態のままレースは進み、34 周を走り終えロッテラー選手が完全勝利、中嶋選手は 2 位となり、TOM'S の二台は無事にチェッカーを受けた。レース終了後、中嶋選手のルーキーオブザイヤー獲得も発表された。

▽レース後のコメント

ロッテラー選手

「悪いコンディションの中で戦ったレースだが、予選で良い位置をキープできたおかげで自分に大きなアドバンテージがあったので、レースは楽しめた。今シーズンを振り返ると、シーズン通して良い戦いができ、パーフェクトな週末を送ることができて良かったと思う。日本に来てから、ずっとフォーミュラ・ニッポンのチャンピオンになりたいと言うのが夢で、SUPER GT のチャンピオンも二回獲得したし、目標をすべて獲得できたのでうれしい。それはチームのサポートがあって成しえた結果である。今年は、海外との往復が多く、細かい点まで関わることができない場面もあった。それでも、チームはいつも自分の事をサポートしてくれた。ルマン 24 時間出場の為、１レース欠場することになったが、舘会長はこれを許してくれ、その代わりチャンピオンを獲得することを約束した。最後にその約束も果たせ、また完璧な週末を最後に送ることができてうれしい」

中嶋選手

「あまりエンジョイできるレースではなかった。前にクルマがいる以上、視界は悪いし想像以上に雨の量も多く難しいレースだった。スタートで前に出られなかった事が敗因。失うものが何もなかったので、プッシュして最後まで集中力を切らさないようにしたという点では満足している。スリックかレインか迷うような状況でスタートしていたら、レースはおもしろかったかもしれない。今シーズンは、ずっとアンドレを追いかける状態だったが、一緒に走ることができて良い経験になったと思う。チームは、レースに必要なすべての仕事を完璧にこなし、クルマの仕上がりもレースごとにどんどん良くなって、

最後ポールポジションも獲得できるまでになった。チーム力もあがりとても良いシーズンだったと思う。自分に関しては、ルーキーとは思っておらず、そういう立場であることを考えて走ってきた。チャンピオンを獲る気持ちでやってきたので、2 位というのは悔しい。来シーズンまたチャレンジをして、チャンピオンを獲得したい」

舘監督

「ドライバー、スタッフに心からお礼を言いたい。メカニックにエンジニア、本当によくやってくれた。今までポールポジションがなかったので、それも達成でき、チャンピオンになれ、何も言うことはない」

5. 第二のファミリーと共に

さあ、シリーズチャンピオン、2 レース共にポールトウィンと、パーフェクトに終えた週末だったが、それはそれで大変である。ずぶ濡れで戦ったあと、雨が降りしきる中、数々の表彰を受け、その後ポディウムから、びしょ濡れのまま記者会見へ移動。今度は、チームスタッフとの記念撮影とせわしない。しかし、大事な一枚を撮ることは、誇るべき儀式のようなもので、2009 年の SUPER GT 以来の勲章を授かったチームの集合写真だ。ここまでのスケジュールで、だいぶ時間が押していた。その後は、オーガーナイザー主催の“シーズンエンドパーティ”へ出席し、ファンのみなさんへ報告も兼ね、お祝いをしてもらわないといけない。撮影を無事に終え、隣接されたホテルへ直行した。

パーティでは、舘監督が音頭を取り乾杯。その後、シリーズ表彰も行われ、TOMS は改めてファンの方々へダブルタイトルの報告をした。

午後 8 時にパーティ終了。このあと、なんとチームの祝勝会が午後 10 時から都内で行われた。撤収作業を終えたチームスタッフも含め、現場にいた全員で祝おうとの監督の鶴の一声で、皆がサーキットから都内へ向った。無礼講の場ゆえに画像は控えるが、日本のレース界の重鎮、舘監督を筆頭に、トムス大岩社長、関谷アドバイザー(SUPER GT、F3 では監督を務める)、トヨタ自動車の永井エンジニアから祝辞をもらい、また両ドライバーからチームへ感謝の言葉が述べられた。ロッテラー選手は、“ トムスは第二のファミリー ” と語り、これまで 6 シーズンずっと戦ってきたチームの舘監督を父親のように思い、またチームの皆をとても大事に思っているのを感じずにはいられなかった。先に行われた記者会見では、物事には始めと終わりがあり、いつかは終わる時が来ると、興味深い発言もしていたが、現時点では、まだ何も決まっていない状況とのことだ。来年の動向がとても気になる 2 人のドライバーだが、舘監督は、“ ぜひ、この二人で戦いたい ” と願いも込めて語った。

終わってみればあっという間のレースウィーク。TOM’S は、完全勝利で全く隙のない仕事をした。レースウィークのみしか、表には見えない訳だが、これまでの戦績を鑑みると、それは想像をはるかに超える各々のプロ意識の上に成り立つ結果だと言えよう。レースのプロ集団は、2 位など要らない、欲しいものは “ 優勝 ” のみ、この精神で戦っている。フォーミュラ・ニッポンのトップの座を得た今、来季からは追われる立場となる訳だが、日本のレース界にその TOM’S の姿がある以上、観る人にも戦う人にも、ずっと感動を与え続けることだろう。

Congratulations　TOM’S !